

2021. 11. 7 (日) マタイ 27:39~44

27:39 通りすがりの人たちは、頭を振りながらイエスをののしった。

27:40 「神殿を壊して三日で建てる人よ、もしおまえが神の子なら自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」

27:41 同じように祭司長たちも、律法学者たち、長老たちと一緒にイエスを嘲って言った。

27:42 「他人は救ったが、自分は救えない。彼はイスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおう。そうすれば信じよう。」

27:43 彼は神に抛り頼んでいる。神のお気に入りなら、今、救い出してもらえ。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」

27:44 イエスと一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。

<説教>

イエスは弟子たちからは裏切られ見捨てられ、ユダヤ人の祭司長たち律法学者たち長老たちからはねたまれ憎まれ、ローマの総督ピラトからは無罪なのに十字架による死刑判決を下され、ローマ兵たちからも嘲けられ、二人の強盗と一緒に十字架につけられました。

そのようにしてイエスはあらゆる人からあらゆる辱めを受けて十字架につけられたことを既に見て来ました。

更に、十字架につけられた後も（ローマ兵たちが戯れにイエスの衣をくじ引きにしたことはもう既に見ますが）イエスは最後まで徹底的に人々からののしられ、嘲られました。

本日の聖書にはそのことが記されています。

27:39 通りすがりの人たちは、頭を振りながらイエスをののしった。

27:40 「神殿を壊して三日で建てる人よ、もしおまえが神の子なら自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」

〈通りすがりの人たち〉、彼らは言うならばたまたまそこに居合わせた人々で、過越の祭りのために地方からエルサレムに来ていた人なども含まれていたかもしれません。

彼らは、「あの人は『わたしは神の神殿を壊して、それを三日で建て直すことができる』と言いました。」という証言（26:61）のことを聞いたのでしょうか。

また、イエスが〈神の子〉だと自称しているという、イエスに反対する人の話も聞いて、「なんという自信過剰、誇大妄想か！」と呆（あき）れイエスに反感を持ったのでしょうか。

〈私を見る者はみな私を嘲ります。口をとがらせ頭を振ります。〉（詩篇 22:7）、〈私は彼らのそしりの的となり彼らは私を見て頭を振ります。〉（詩篇 109:25）等とあるように、「頭を振る」のは嘲り、そしり（誹謗）、侮辱等の仕草です。

彼らは十字架のイエスに向かって言いました。

「〈神殿を壊して三日で建てる〉そんなすごい能力がおまえにあるなら、その力をここで発揮して〈自分を救ってみろ〉。」「おまえが自分を〈神の子〉だと言うからには、その証拠に〈自分を救ってみろ〉。」「それにはおとなしく十字架につけられっぱなしじゃなくて、自分の意思と力で〈十字架から降りて来〉ることだ。それが一番だ。自分の意思と力で自分を救うことができないならおまえのいったいどこが〈神の子〉だ。」と。

それは「あなたが神の子なら、これらの石がパンになるように命じなさい。」（4:3）と言

った荒野での悪魔の誘惑と同じでした。

それは要するに、「あなたが神の子なら、父なる神の意思とは関係なく、神の子としての自分の意思と力を大いに発揮して、今のこのどうにも苦しい現状から脱出するべきだ。父もそのことを良しとされるに違いない。」というものでした。

そのようにして彼らはイエスを誘惑し、それでも自分の力で〈十字架から降りて〉〈自分を救う〉ことをしないイエスを嘲りののしりました。

27:41 同じように祭司長たちも、律法学者たち、長老たちと一緒にイエスを嘲って言った。

27:42 「他人は救ったが、自分は救えない。彼はイスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおう。そうすれば信じよう。

27:43 彼は神に抛り頼んでいる。神のお気に入りなら、今、救い出してもらえ。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」

〈祭司長たち〉、〈律法学者たち、長老たち〉、彼らは初めからイエスのあからさまな敵対者、イエスをねたみ憎んで殺そうと計画した張本人たちです。

〈他人は救ったが、自分は救えない。〉とは、「今このように十字架につけられるまでに惨めな姿をさらして、こうして〈自分は救えない〉のだから、〈他人は救った〉なんて言うのも本当は嘘だ、私たちは絶対に認めない。」との主張、嫌（いや）み、皮肉がたっぷり込められた言葉のようです。

もちろん実際にはイエスが「他人を救った」事実を何度も見聞きしてきたにもかかわらず、頑なに故意にそのことを認めないでもいたのです。

〈彼はイスラエルの王だ。〉と言うのも、彼らがイエスをそうだと認めているのではないことは明らかで、むしろ正反対に「こんな者が我らユダヤ人が誇る〈イスラエルの王〉であってたまるか。」とイエスを〈嘲って言った〉のです。

〈今、十字架から降りてもらおう。そうすれば信じよう。彼は神に抛り頼んでいる。神のお気に入りなら、今、救い出してもらえ。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。〉と言った彼らの言葉に、マタイは「主に身を任せよ。助け出してもらえばよい。主に救い出してもらえ。彼のお気に入りなのだから。」（詩篇 22:8）と詩人を嘲った敵対者の言葉を思い起こしたことでしょう。

そして、この彼らの言葉は、荒野での悪魔の誘惑で言うなら二番目の、「あなたが神の子なら、下に身を投げなさい。『神はあなたのために御使いたちに命じられる。彼らはその両手にあなたをのせ、あなたの足が石に打ち当たらないようにする』と書いてあるから。」（4:6）に相当すると言えるでしょう。

それはつまり、「父なる神の意思でもないこと、父から命じられてもいないことを試みて、そのときの父の“緊急救助”を要求しなさい。父に“緊急出動”を命じなさい。そうやって救い出してもらいなさい。あなたが父なる神の愛する子なら父は助けてくれるはずだ。そうやってあなたが力ある神の子だという証拠を示しなさい。そうすれば人々は驚き、また安心してあなたを信じるでしょう。」というものでした。

そのようにして彼らはイエスを誘惑し、それでも神の助けを求めず〈十字架から降りて〉〈自分を救う〉ことをしないイエスを嘲りののしりました。

そして更に、〈イエスと一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをのしった〉（27:44）のです。

こうしてやはりここでもあらゆる人々が、「もし本当にイエスが神の子なら十字架の死から自分を救うことができたはずだ。父なる神がイエスを助けないでみすみすイエスを十字架で死なせたことなどありえない。」等と言って御子イエスを（と同時に父なる神をも）嘲りののしることになったのです。

しかしイエスは人間（と悪魔）の嘲りののしりを耐え忍ばれ、誘惑に打ち勝たれました。

そのようにイエスが〈十字架から降りて〉〈自分を救う〉ことをしなかったのは、父なる神に〈十字架の死にまで従われ〉（ピリピ^o 2:8）た全き従順の故でした。

父なる神が、ご自分の全き従順を完全に受け入れてくださり、ご自分を必ずよみがえらせてくださるといふ神への信頼（即ち信仰）の従順の故でした。

そしてそのイエスを信じる私たち罪人にご自分の従順（「義」とも言えます）を着せ、神に受け入れられるようにしてくださるのですから、それはまた私たちのためでした。